「破戒」と飯山

川副国基

藤村を深く知りたいという気持から、馬籠(まごめ)はもちろんのこと、小諸(こもろ)へもたびたび出かけた。ヨーロッパへ旅したときにはパリのポール・ロワイヤル通りの藤村の旧い下宿あとをもたずねた。

ところが、名作「破戒」の舞台となった信州の飯山(いいやま)やそこの真宗寺（作中の蓮華寺）は、つい最近までおとずれる機会がなかった。なんとなく心のこりの気持であったのだが、幸いこのたび飯山市の公民館で藤村の講演をする機会が与えられ、ながい間の念願を達して、飯山というところをこの目で見ることができた。

上野駅を朝九時半の特急で発つと一時には長野に着き、そこから飯山線の国電に乗り換えると二時にはもう飯山に着くのだった。長野からの飯山線は千曲川の流れがひらいた山あいの平地を縫うようにごとごとと走っていく。右側の車窓からは絶えず、大きくまがりくねる荒涼とした千曲川が眺められた。すでに犀(さい)川を合わせた千曲川はゆたかな水量を湛えた悠然たる大河である。

飯山は本田氏二万石の旧城下、いまは近村を合併して人口三万五千の小都市。仏壇の製作でむかしから知られていたが、いまはスキーの製作と「えのき茸」の生産で有名である。越後の高田に発したスキー術はただちに雪の深いこの飯山に伝えられ、高田と並んでわが国スキーの発祥地となった。冬の豪雪も有名で、町の軒に雪よけの通路のための「ガンギ」が設けられていることも高田の町と同じであった。

わたしが出かけたのは十二月の初旬で、この地方のこの時期にはめずらしいといわれるほどの晴天であったが、畳敷の公民館（小都市にはすぎたような立派な建てものであった）の入口にぬぎすてられた聴講の人々のはきものの大部分はゴムの長靴であった。天候は激変して雪になることが多いというし、この土地の人々はきびしい冬のおとずれを警戒して、もう身についたいかめしい冬構えの支度で町を歩いていた。寒風の吹く日本海から三十キロの地点である。

翌日、午前中は低い雲が垂れ包んだようなどんよりとした陰欝な天気であった。冬に入るといつもこんな空模様だという。千曲川のひろい川幅は暗い影をやどして町の東に迫っていた。陰湿、陰気といった感じそのものの冬の町であった。

藤村は小諸時代に三回ほどはこの飯山をおとずれたらしい。藤村が飯山を描いているのは「破戒」と、「破戒」以前の「椰子の葉蔭」という小説と、「千曲川のスケッチ」中の「川船」「雪の海」「愛のしるし」などの一連の飯山ものとである。

藤村は、飯山から出てきたさるところの娘さんを送って川舟で千曲川をくだり飯山まで届けたことがあったという。そのころ飯山線

はまだ開通していなかったし、千曲川の水量もゆたかで舟運が便であったのである。暗い内攻性の藤村の精神に、飯山の町の暗鬱さはそのとき深く印象づけられたのではなかったろうか。飯山訪問がはっきりしているのは明治三十七年の一月、画家の丸山晩霞との行である。この一月には東京から僚友の田山花袋が小諸に藤村をたずねてきている。日露開戦の一ケ月前で、このときおそらく花袋は、写真班員として開戦のあかつきには従軍するつもりだと藤村に伝えたであろう。藤村が、また「自分は人生の従軍記者だ」という決意をこのとき新たにしたとすれば、それはすでに小説「破戒」の構想が熟しかけていたことであろう。そういうときの飯山ゆきであった。

「破戒」の舞台になにゆえに小諸ではなく飯山が選ばれたのであろうか。部落の問題をとりあげることではあるし、自分が現に住む小諸を舞台にすることはあまりに生ま生ましいことであったであろう。すでに卑近なモデル問題で苦がい経験を重ねていた藤村であった。人の知ることのすくない辺鄙、僻遠の飯山、瀬川丑松の暗い心象に通う土地的環境の飯山は、この小説の構想に当ってはやく藤村に舞台の地として選ばれたのであったと考える。

しかし、この「破戒」でも藤村は、つまらないモデル問題でふたたび、みたび、あと味のわるい思いをのこしたはずである。それは蓮華寺の住職の描きかたにおいてである。

飯山は寺の多い町であるというが、なかでも真宗寺は広い鬱蒼とした境内をもった名刹であった。そこの住職の井上師は近隣に聞えた名僧知識であり、名を聞いて慕い訪ねる人も多く、藤村もそのひとりであったわけだ。再三の飯山訪問のうちおそらく一、二回は藤村は真宗寺の厄介になり井上師の高教を仰いだと思われる。「若菜集」の詩人の声名はいまだこの地方では井上師の上に出ずるなどのことはできなかったのである。その井上師を藤村は「破戒」のなかで、名僧の仮面をかむった無慚の僧として描いたのであった。宗教の堕落を描きたかったことはわかるのだが、蓮華寺がただちに実在の真宗寺と推され、その住職がただちに井上師と推される場合において、これはやはり慎むべきことであった。

井上師は激怒し、井上師夫人は「藤村の馬鹿もの」といって憤られたと、井上師の孫に当る現住職の井上弘雄氏は語られた。当然のことであろう。藤村の想像力の貧しさがここにも露呈しているし、藤村の道義感に疑いをもたせるものがここにもある。

真宗寺は昭和二十七年の大火（百数十戸が灰燼に帰した）で延焼し、その直後の区劃整理で、いまはむかしの宏大な境内のおもかげもない。しかし、いまはその境内に、藤村の長男楠雄氏筆の「小説破戒蓮華寺跡」（昭和三十九年建立）の碑と、原稿「破戒」の冒頭をそのままに刻んだ記念碑（下水内教育会、昭和四十年建立）とがある。

飯山からひとつ長野寄りに「蓮（はちす）」という駅がある。千曲川をへだてて秀麗な高社山（たかしろやま）が聳え沿線ではもっとも心をうつ景色のよいところである。真宗寺を蓮華寺と言い換えたのは、藤村はこの「蓮（はちす）」からの連想ではなかったかと、これは帰京の車中でのわたしの思いつきであった。